

帝釈天立像

(愛知県瀧山寺)

田中 茂

仏像は、実在性と永遠性が強く結びつくものです。

高松勤務時代、ドライブがてら八十八か所巡りをしてから、仏像の鑑賞が私の趣味です。

仏像を取り巻く歴史、仏師の思いに興味を持ち、銅版画の題材として取り組んでいます。

仏像の構成で最も種類が多い「天」の中でも、愛知県岡崎にある瀧山寺宝物殿に安置されている聖観音菩薩立像の脇侍の帝釈天立像の顔立ちと、衣裳の^{くん}裾(巻きスカート)の美しさをエッチングで描きました。

この帝釈天立像は、鎌倉時代に制作され金色の彩色が施され、表情がはっきりと見えます。

切れ長の目にすっきりとした鼻、厳しくも愁いをおびた表情の顔面は、細かいひび割れが網の目のように発生しており歴史を感じます。

この彫像の背後にある装飾の光り輝く「後光」の処理と、裾に刻まれた模様を写し取ることに着眼いたしました。



下絵作成は、顔立ちに光を当て立体的に浮かび上げらせ、頭部から下げる飾り、裾に描かれた模様、右手に^{とっこしよ}独鈷杵(煩惱を打ち砕く法具)、左手は腰に当てており、帝釈天立像の美しさと力強さを求めました。

帝釈天立像に光が当たる白色の部分と黒色の濃淡の階調は、エッチング技法で腐食の時間と腐刻の深さで線や面を表現し、アクアチント技法から“明るさ”“陰影”を交互に繰り返し、線の濃淡や強弱ならびに面の明暗調整を行い、モノクロームの黒の濃淡を作成しました。

製版は刷り上がる用紙とインクの材質感に合ったものを選択し、プレス機で圧力をかけて印刷を行いました。

この作品は、線と面は黒の濃淡が主体となるので、黒色の背景から光と陰によって作り出される立体感や質感を表現することを重点に、明度調整は黄色の雁皮紙を載せて完成させました。